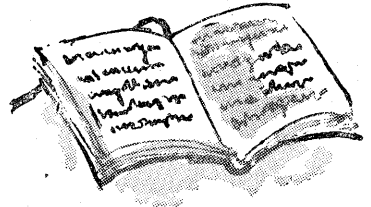


## 幼児にあらわれる人間の原型



津守 真

私どもが外部から見ることでできる子どもの行動は、子どもの世界のすべてではありません。私どもは子どもと共にいて、一緒に

になっておもしろくなったり、ふしぎに思ったり、心に感じるものがあります。また、ひとつの行動の中に、これから伸びてゆくであろう、いろいろの可能性を感じとることができます。保育の実践においては、客観的観察眼や、理論的思考よりも、主観的感覚や直観をはたかせていることが多いように思われます。もちろん、客観的観察や、理論に基づいた判断を軽視するわけではありません。ある時点で、子どもからはなれて、冷静に見られることは、自分にとっても、子どもにとっても大切なことがしばしばあります。しかし、その場合でも、保育の最中には、そのような態度に徹することはできません。そして、全体として見るならば、保育者が、心に感じ、可能性を見る保育者自身の眼が失わ

れたら、保育から、いきいきした生命力が失われることになるでしょう。

保育を、大きく見るならば、実際の保育の場における保育実践と、保育の後や前に、保育の場で起こったことを考えること、すなわち、保育の考察とに分けることができます。保育実践における保育者の態度は、子どもと共にあり、そこで起こっていることをそのままに感じとることのできる実存的態度であるということができましょう。その態度を失って、他の人の作った方式やプログラムに身をゆだねたら、子どもとともに創ってゆく創造的な生活とはならないでしょう。保育実践においては、その人の直観や感覚が生かされねばならないといえます。

保育が終わって後、そこで起こったことを考察するときには、より多く思考をはたかせることを必要とします。そのときには

は、分析したり、分類したり、相互関係をみたり、段階に並べてみたり、いろいろと操作することができます。そのような外的操作が有効なこともあります。保育者が保育の中で起こっていたことを理解し、次の保育実践につなげてゆくには、それとは別の思考法があります。それは、再び、保育実践の際に用いた、直観と感覚を補助とする思考です。すなわち、保育の場で心に感じた体験を、もう一度、自分の心にとらえ直すところから出発します。あるいは、子どもの残した何らかの具体的な表現、作品などを、ゆっくりと味わうところから始めます。

保育の最中に心に感じたことは、すぐ次の行為を生み、それはさらに新たな感動を生んで、一か所に止まるところがありません。そして、それは、次の日の保育へとうけつがれてゆきます。保育の実践としては、それだけでよいともいえます。けれども、いろいろの精神機能をもった大人として見るとき、保育者はそれだけで満足できない場合があります。保育の行為とは、いったい何であるのか、子どもをどのように理解したらよいのかなど、いろいろの疑問が出てきます。そこで心に感じたものを、もう一度とらえ直して、そのことの意味を問う作業をすることに、大人としての意味が生まれてきます。

第一に、保育の場面で、保育者が心に感じたことを、自分の内

的感覚によって、体験し直すことです。保育の最中には、次々とできごとが起こるので、内的にふれたものは、心の琴線にふれただけで、通りすぎてしまう場合が多い。しかし、子どもの方は、保育者の忙しさとは関係なく、自分自身の見方で生活していきます。その子ども自身の見方は、論理的思考によってすすむのではなく、また、目的に向かってまっすぐに進むものでもありません。それは、大人から見たならば、突拍子もなかったり、ばかげたようにみえるほど、主観的、空想的であったりします。子どもは、客観的な物を知覚しているのではなく、自分の内的感覚でとらえています。それは大人になる過程のどこかで、背後にかくれて、論理的、客観的な見方が優先してしまいます。大人は、しばしば、内的感覚で物を見るのに努力を要します。けれども、人間の中にはいつでもそれがあることは明らかで、すぐれた絵画などを通して、その画家の見方に眼を開かれる思いがすることは珍しくないでしょう。子どものものの見方は、まさに、芸術家の眼のようなものです。子どもの見方に少しでもふれようと思ったら、子どもと共にいた場面を、大人自身の内的感覚でとらえることが必要になります。子どもと全く同じ見方をすることはできないけれども、子どもの見方の特色であるところの内的感覚に価値をみとめ、それを大人は使ってみるならば、子どもと共通のもの

にゆきあたるでしょう。

第二に、子どもの行動にふれて、大人が自分自身の心を感じたものを、自分自身の体験に照らして、その意味をたずねることで、子どもの行動は、意図的、意識的なものの連鎖として生じるよりも、むしろ、心の底に動いているものが、そのまま、行動として外面にあらわれるかと思えます。その点で、子どもの行動は、子どもの心の世界の表現と見ることができるとでしょう。具体的な行動としては、身近な小さなことに見えても、子どもにとっては、それが全世界であり、ごくわずかの時間のできごとであっても、そこには時間をこえた世界があるのです。そして、具体的なことがらは異なっても、その行動を通して感じられるのと同じことを、大人自身の体験の中に見いだすことができます。大人の場合には、生活空間が広くて複雑だったり、意識的な歪曲<sup>ゆがみ</sup>がなされていくのでわかりにくくなりますが、子どもの場合には、それが直截にあらわれるのだと思えます。たとえば、大人が、心の中に求めるものがあつて、長年月かけて、いろいろのことにふれて道を求めてゆくのと同様に、小さな子どもは、泣いたりわめいたりしながら、自分の求めているものをさがし、一日の間に、あるいは何週間かの間に、その行動はしだいに変化してゆきます。出口がわからないで模索している段階、自分を中心に中心を見いだして

統合ができた段階など、その心の状況にに応じて、子どもの描く描画が変化していったりします。具体的な生活の上でのあらわれ方は異なっても、人間の心の原型ともいえるものが、子どもにも大人にも共通にあるのだと思います。大人は、そのあらわな姿を、子どもの素朴な行動にふれることよつて気付かされます。子どもが直観的に感じとっているものを、大人は、子どもの行動の連鎖の系列の中に発見することもありますが、それは、分析し分類する思考をはたらかせるときには、失われてしまうので、直観をはたらかす思考が必要になるといえます。

従来、保育者が、子どもとの心のふれ合いの中でとらえてきた子どもの生活は、主観的といわれて排除される傾向がありました。保育者も、明瞭な教育意識がもてないときに、そのことに劣等感を感じることが多くありました。けれども、こうした正面の議論から排除されてきた主観的なものが、保育活動の主要な部分を占めてきたのです。それがなかったら、子どもの心にふれてじっくりと交わることもできず、大人は子どもとすれ違ひの生活をつづけてゆくことになるでしょう。いまや、この主観的といわれてきたものに位置を与えて、その部分に光をあてていかなければならないのだと思います。

きょうは、こういう考え方に立って、幼児の行動のいくつかを

考えてみたいと思います。保育における子どもの行動は、実に多様であり、まだ、その全貌を見渡すことはできません。また、それは、常に保育者や研究者自身の歩みと切り離すことはできないので、どこからでも、その人がたまたま出会ったところから始めてよいのだと思います。

## ひとつの体験

私が大学を卒業してしばらくして、この付属の幼稚園にはじめて参観にきたとき、砂場で三歳の子どもが遊ぶのを見て、非常に驚きました。とても一生懸命に遊んでいるのです。私が近くにいるのも気がつかないくらい、熱心に遊んでいました。それを見て、子どもはこんなに一生懸命になれるということを、まさまざと知りました。私も若いころで、勉強が楽しくてしょうがなかったのですが、大学生が勉強をしている姿と、子どもが砂場で遊ぶ姿とは同じだと思いました。大人の目からみると、砂場の子どもは、砂をこねたり、指をつっこんだり、水をいれたり、単純なことのようにみえますが、そばでみていると、それは一生懸命なのが目まぐるしくわかります。ああ、これだなと思いました。小さいときに、こんなに自分を打ちこむ生活ができているということが、人間にとってどんなに大切なことなのかおぼろげにわかったような

気がしました。それ以来、同じような場面に何度も立ち会っていますが、子どもが一生懸命に生活し、遊びに没頭することの大切さを思わざるをえません。それがいろいろの能力が出てくる母胎であるし、また、子ども自身が成長してゆく場所であると思います。また、それと同時に、いろいろの幼稚園にいきますと、子どもがほんとうに遊べるように、まわりをつくっている幼稚園が、どんなに貴重なことか、それが決してたやすいことではなく、大人が一生懸命になって整えなくてはできないことだと考え続けさせられています。

一方、その中にいる先生はどうかというと、子どもが自分のなまの姿を出して遊んでいる中で、大切な点をちゃんととらえている。参観者や管理者からは、あんなことをさせて困ったとか、あんなことをしてどうなるのだろう、と思われるようなことの中に、子どもの生活をちゃんと見てとり、その中に、子どもなりの考えや感じ方のあることを体で感じとり、一緒に子どもと楽しんでいるようすがみえます。そうしている間に、子どもはまた変化していき、いつのまにかわきまえをもった、立派なおもしろい子どもができて上がっていきます。こういうことを、何度も何度も、くりかえし見せてもらっているように思います。

先生の側からいうと、自分の見方が変わってくると、子どもの

ことがおもしろく見えてくるようです。「こんなことをしなくては」とか、「こんなことをして困ったな」と思いつぎたり、またどうしても今日じゆうにここまでやらなくてはとあまり思っている、子どもがやりたいと思っていることや感していることが見えてこない。自分がどうしても今日じゆうに、あるいは、今週じゆうにしくはならないことだけが覚えてしまつて、子どもの中の貴重な芽ばえを見のがしてしまいます。私どもがどういう目で子どもを見るかは、ずいぶん大切なことと思ひます。もう少し先に進みましょう。

### 内部の不思議さ

私は先日、三歳の子どもから、折紙を不規則にいく重にも折りたたんだセロテープでやたらにはりつけたものをもりました。手にとつていじつてみると、子どもは、カメラだといふので、カメラに似た形ではありませぬ。それは、手にとつてよくみると、内部はさらに折りたたんであつて、いく重にも中に折りこんであるのがわかります。紙を折ること、重ねること、たたむことは、いずれも、平面から立体をつくる作業です。何回か折つてたたむと、そこに内部ができます。ときには、子どもは、自分が一生懸命にかいた紙の上に別の紙をはりつけ、さらに何枚も紙を

はり重ねて、かいたものを見えなくしてしまいます。かいたものは、奥の奥の内部にいれこんでしまうのです。折り紙を折りたたむだけではありません。立派な画用紙にかいたときにも、かき終つると、それを丸めたり、不規則に折りたたみ、持ち歩いたりします。せつかくかいた、しわのない紙を、折つたりたたんだり、のりをベタベタはりつけてしまうのですから、そこだけを見ていると、大人はそれをとめたくありません。けれども、子どもはごく自然に、折つたり、重ねたりするので、そうしなくてはいられない子どもの感覚が動いているのです。

子どもは、物体にふれたときに、その物の内部に興味をもちます。カメラは、中から写真が出てくる密閉した箱ですから、子どもにとつては特別ふしぎな物です。カメラというのは、そういうふしぎな内部をもつた箱なのです。だから、子どもが一枚の紙からカメラを作ろうとするとき、一枚のペラペラ紙だったらカメラにならないのだと思ひます。形は似ていなくても、折りたたんで内部をつくれれば、カメラになります。カメラの本質は、形にあるのではなくて、中から絵の出でくるふしぎな内部にあり、それがカメラであることを、子ども感じとつていふのです。

内部のある物を子どもが好むことは、まだほかに、いろいろのところで見られます。まだ幼稚園に入らないくらいの子

どもが、お母さんの古いハンドバッグを肩にかけたり、手にもって歩きまわって遊ぶことは、どこの家庭にもみられる姿です。紙で何かをつくれるようになると、ハンドバッグやかばんを好んでつくりまわす。ここの幼稚園を見ていまして、園庭でビニールの袋に砂利をいれて持ち歩くのは、しばしばみられます。洋服のポケットは、子どもが興味をもつもののひとつです。子どもと遊んでいると、いつのまにか、ポケットの中に木の葉や砂利がはいっています。ポケットに手をつつこんで、何があるかな、といつてもったいぶってとり出すと、子どもはきつと興味をもつてみつめます。

内部は、いつまでも内部のままにとどまっています。それは開いてみないではいられません。おみやげは、紙に包んで、箱に包んで、そのまわりをまた紙に包んで、いく重にも包まれている中にはいつているところに、魅力があるのです。子どもは、胸をわくわくさせながら、それを開いてゆくのを楽しんでいます。いく重にも内部に包みこまれているところに、心もこめられているかのようなのです。

ダンボールの箱をおくと、子どもはきつとその中にはいろいろあります。そして出たり入ったりしてあそびます。子どもが最も好むあそびのひとつです。道路のわきにおいてある冷蔵庫に入っただけで

れなくなつた事故の話が新聞にときどき出ます。最も悲惨な事故のひとつだと思ひます。

子どもは、物の外側をみて、その内部をいろいろと空想します。木の実や種は、子どもが最も不思議に思うもののひとつのようです。私も、小さな種の一粒をのひらの上のせてみると、ほのかに暖かきを感じ、その内部の世界にいろいろと空想をめぐらします。中味をわつてみても、特別目に立つものも見られません。けれども、種の内部には、すべての成長の根源がはいっていることを疑ひません。子どもは、種のととをいって、その内部に部屋をかき、いきものをいれたりします。種の世界を見ているのです。子どもは種の世界に不思議さを感じているのですから、それを大切にしたいと思ひます。子どもを一列に並べさせて、こまごまと注意を与えて、一粒ずつ種を配給して、子どもはたいくつしながら順番を待つて、植木鉢に種まきをするというようなことはないようにしたいものです。

子どもがえをかくとき、見えない物の内部をかくことはしばしばみられます。ねこや犬の動物のえをかけたとき、おなかの中に食堂があつたり、寝室があつたりすることは珍しいことではありません。子どもが動物をみると、外側ばかりでなく、内部を見ているのであることがわかります。あのもじやもじやした毛皮の

中にはおなかがある。そのおなかの中には、何かが入っていると思ふらしい。子どもの描画には、内部や中味、内側に包みこむことをかこうとしている例はいろいろありますが、ここでは省略します。

さて、こういうことは、子どもにふればごくあたりまえのことですが、考えてみるとなかなかおもしろいことです。内部というものは目に見えないところです。子どもはその見えない内部があることに興味をもち、不思議に感じ、探究しようとするのです。私どもも、子どもを見るとき、とく行動の外側だけを見がちですが、ここには内部があることを疑うことはできません。子どものする活動には、大人の目に見えるところだけではなくて、目に見えないところにいろいろのものがある。それが何であるかはわからないけれど、子どもにとっても大事なことでであると察することができるといふことは、大人にとって大切なことであると思います。

そのときにはわからないことが、あとになって  
わかってくること

先だって、私は、ある幼稚園に見学に行きました。初めての幼稚園ではあり、乱してはいけないと思ひ、すみの方でそつと見て

いました。すると一人の男の子が、「おじちゃん、いいものを見せてあげようか」と寄ってきました。私は「うん、みせてくれ」というと、私を自分の部屋につれてゆきました。「ほら」といって戸棚を開くと、そこには、ヤクルトの小さなびんや、牛乳びんなど四十個ほど並べてあり、色水が作ってありました。たくさんあるのでおどろいて、みんな今日作ったのかときくと、「ちがう、毎日作ったんだ」といいます。何週間かかったか知りませんが、毎日作った色水を戸棚の中のためにためてあることに、私はたいへん感心しました。それだけのことをやって下さる先生は、なかなか度胸もあるし、えらいと思いました。その四十個の中には、きょう飲む牛乳も入っている。

「これはなかなかすごいなあ、たくさんあるなあ」と感心してそばにすわって見ていると、そこにひとりの女の子がきまして、「おじちゃん、ごちそう作ってあげる」とお盆にのせていろいろ持ってくる。「あめ、作ってあげる」といって、リボンに色をぬって、ボール紙にはって出してくれました。私は「おいしそうだなあ」としゃぶっているうちに、その子はだんだん来てきて、私の背中によじ登り、そのうち、首に、頭によじ上ってきました。私はその場を乱してはいけないし、静かにしていなければと思っていました、相手にならないわけにはいきませんでした。

ちようと、その女の子が少し離れたとき、他のクラスや、廊下のすみや、遊戯室にまわつていくと、気がついてみると、その子がまた私の横にちゃんといるので。「おじちゃん、あげようか」といって、また何かもってくる。いろいろ話しかけてくる。一日だけ見学にきたおじちゃんに、こんなに寄ってくるのは、何かはわからないけれど、何かはあるのだらうと思ひ、その子とおしゃべりをして過ごしました。ただそれだけのことですが、後で先生にうかがうと、その子どもはお父さんがいないのだとのことでした。また、先の男の子は、ふだんからエネルギーをもてあまして、先生だけではどうしていいかわからないときがあるとのことでした。子どもが何か言ってくる時というのは、その子にしてみると、大人に何か訴えたい、そうしなくてはならない何かがあるのだと思ひます。それが何であるかは、そのときにはわかりません。その瞬間には、その子のいうことを聞いたり、積極的に遊んだりするでしょう。そうやって子どもと交わつてゆくうちに、その子の中にある大事なものが何かだんだんわかつてきます。それが子どもとの保育的ふれ合いの実際だと思ひます。

さきほどの砂の話にもどりますが、三歳の子どもが、一時間あるいは一時間半も、一生懸命になつて砂遊びをするというのは、いったいどういふことなのでしょう。また、いったい何が

面白いのでしょうか。いまの話の筋でいくと、保育者にとって、それは何かわからなくてもかまわないわけです。保育者にとつては、子どもがそんなに一生懸命にやっているのだから、そこには、そうしなくてはならない気持ちがあるのだということを知つていれば、その理由を頭でわからなくてもかまわないのだと思ひます。そのことを考えるのは、後になつてからのことです。

### 土をこねることの意味

よくみてみますと、形をつくるようになる前に、子どもはいろいろのことをしています。土や砂を手でたたく、指をつっこむ、砂をにぎる、にぎつて持ち上げてパラパラと落とす。砂をほうり投げる、手をつっこんで奥の方に手をいれる、水を流す、水でぐにやぐにやにこねるなど。三歳以前の子どもだと、それが大部分です。五歳、六歳になつて、形を作れるようになって、このようなことをたくさんしています。私どもも、同じように、砂の中に手をいれてみると、見てただけではわからなかったことがわかります。土や砂の中に手をつっこむと冷たい。その砂をにぎつて、持ち上げて、パタッと落としてみます。自分がにぎつていた砂が、パラパラ落ちるのはなかなか愉快なことだと気がつきます。物の形を作る以前に、冷たさとか、土や砂とふれる快さがあ



り、それが土や砂の大切な点です。近ごろ、シャベルやくまでのようなものがよく使われますが、道具を使う以前に、てのひら、腕、あるいは手の中で、もっと直接に砂や土をいじることが大事だと思います。また、砂場や土の上にペタッとすわってみると、おしりからずーっと伝わってくる冷やかな感覚があるのがわかります。体の下から伝わってくる土の感覚、大地の感覚があります。靴をぬいではだして土の上を歩くことは、子どもにとって大きな体験です。現代の道路はコンクリートで、家に帰ってもコンクリートの家で、はだして歩いても気持ちのいいところが少なくなりました。ほんものの土の上をはだして歩くというのは、子どもにとって大切な体験だと思います。これから都会の生活が人工的になるほど、それとは逆の昔ながらの土の上をはだして歩くことを、子どものために積極的にとっておいてやらなければ、子どもは大地を知らないで大きくなってしまおうでしょう。そうなる、子どもは人間の根底にあるいちばん大切なことを忘れてしまいはしないかと心配になります。

はだして土をふみ、おしりの下から大地を感じ、そして土をこねる、そうやって子どもは土の性質を知ってゆきます。土の性質にしたがって何かを作るわけです。紙で作ると、木で作ると、プラスチックで作るとそれぞれ違います。作るというの

は、素材の性質にしたがってなされる作業です。水分をふくんだ土をにぎると、自然に形ができます。両方のでのひらで押せば、平らなおせんべいができるし、両手で回せば、おだんごができます。それを両手でもみつぶけると、へびになります。ねばねばした粘土だったらそうなるが、かわいた砂だとそうはいかない。こうして、手の性質と、土の性質と両方が合わさって自然に形が生まれます。砂や土で作るといのは、最初からこういうものを作ろうということが頭にあって作るのではなくて、こねているうちに自然にできてしまう場合が多いです。しかも自然にできた形というのは、土の性質にかなっているので、おもしろい形ができる。昔から土で作った器やつぼは、人間の文化の中でも非常に古くからあるわけです。

プラモデルはこれと対照的です。最初から作るべき設計図があり、部品が決まっています、この部分品とこの部分品をつけて、こうして部分が最初にでき、あらかじめ作ってある設計図に合わせて作っていきます。作るという行程において、砂をこねる、土をこねる、粘土をこねると、プラモデルを作ると、正反対の働きだということがわかります。近ごろ小学生でも、プラモデルはやるけれども、木をけずって、船や飛行機を作ることが少なくなりました。私が少年のころにはプラモデルはなかったし、木をけ

ずって自分の好きなような形に作っていくのは、非常におもしろかった記憶の中のひとつです。木をけずっていると、思いがけない形ができる。その思いがけない形がヒントになって、また次の形を作るといふ具合で、プラモデルでは得られないおもしろさがあります。

土と砂は、こねているうちに、思いがけない形ができますが、あるところまでいくと、子どもはそれをこわします。できるところまでがひとめぐりで、子どもはできたものをとっておこうとしない場合が多いのです。時には、あしたまでとっておいてね、と言うこともあります。ひとつできると、それをこわして、もとの土にもどすというのは、子どもにとって自然なことのひとつだと思えます。われわれの精神の作用は、ある所までくると、自分の精神的無理もでてくるし、自分の自我、個性もでてくるし、それは自分に気がいらぬものになり、またもとの大地にもどしてやるという性質を持っているようです。混沌の中にもどしてやって、そこでもう一度出発することにより全然ちがうものができる。作るものをこわすという行為には、こうした積極的な意味があるように思えます。

保育という仕事のことを考えてみると、土いじりと大変似ていると思えます。最初から設計図をひいておいて、一部のくるいも

ないプラモデルを作る作業と、保育の作業とは大変違う。その日の保育からどんなものができるかは、最初からわかっている。ひとつひとつの段階で、先生が子どもと一緒に考えてやり、子どものやることに感心したり、子どもが持ってきてくれるものに、ああこんなものがあつたと思つて、そこでおもしろく思つて手にとつてみたり、それからまた、先生も今日はこんなことをしようと思つて物を出したり、物を作り始めたり、そうやっていくうちに、その中に子どももひきこまれていきます。あの子の生活、この子の生活、ひとりひとりの子どもの生活が集まり、そしてまた先生の生活が加わつて、だんだんに変化し、一日の終りになり、ああ今日はこんな一日が送れたと、ある時は満足し、ある時は心残りの気がしながら、一日の生活が作りあげられていきます。こういう保育者の一日、子どもの幼稚園の一日は、ちょうど土をこねるのと似ていると言つていいでしょう。なおもう一つつけ加えるならば、子どもと先生の間には熱気です。一生懸命になつて、夢中になつてやるのは熱気です。そうやって、精神的な火が燃やされ、何か心の底からわき上がる熱気があつて、そこは思いがけないおもしろい幼稚園の一日ができ上がつていきます。

## 地下のイメージ

いま、土を子どもはどうしてそんなにおもしろく感じるのかということから話を始めましたが、土をいじっていると、もうひとつおもしろいことに気づきます。木の下の土をいじっていると、

土の中から虫が出てきたり、卵や幼虫が出てきます。幼稚園で砂場を作ることは、日本では一般的になりましたが、土をいじることとは、これから特に大事なことになると思います。土をいじって虫が出てくることを、子どもは不思議がり、喜びます。土をいじるのがいやな子もいますが、それも、ある壁が破れると、子どもは積極的におもしろさを持つてみるようになります。一体どこから虫がでてくるのだろう、と土をほじって見ると土の下に虫が住んでいる。その土の下にもうひとつの世界があることを、子どもは信じて疑いません。だれでも、小さいときにありの穴をほじった記憶があるだろうと思います。ありの穴の中には何があるのだろうかとほじっているうちに、土でふさがってしまつて残念でたまらない。子どもにお話をするとき、ありの穴を前にして、その中のありのおうちの話をすれば、きつと幼稚園の子どもは喜んで聞いてくれます。

地面の下にはもう一つ別の世界があるということ、大人にと

っても重要です。われわれの見えている世界だけでなく、自分の心の奥の方に別の世界が口を開いている。この中に入っていくと、あなたにも、私にも共通の世界がある。子どもは、そういうつながりを、ありの穴いじりながら見いだしているのではないかと思います。

ここにある絵は(写真上)、手紙いれの袋のために、子どもがすぐに書いてくれたものです。地面があつて、ポストがある。おもしろいことに地面の下にもう一つ穴があつて、その中に生きものが入っています。子どもにとっては、地面の下の世界があることは疑いのないことなのです。手紙をいれるというので、地面の下に通路がついています。空には、鳥がとんがいて、おひさまがある。地面の上の空にも、子どもにはいろんな世界があるんです。人間は、その間を歩くのです。子どもは、心の中にある世界を、目で見える形にしてみせてくれます。大人の頭では馬鹿げているかもしれない。忙しい大人の生活では、自分のスケジュールしか目にうつらないのです。早くしなければおくれるからというのでは、大人の世界のこと、子どもは、そこにじつとして、地面をほじくつて、とどまっていたのです。そうやっている、こういう地下の世界が見えてきます。子どもの地下のイメージを示す例はまだたくさんありますが、このくらいにしておきましょう。

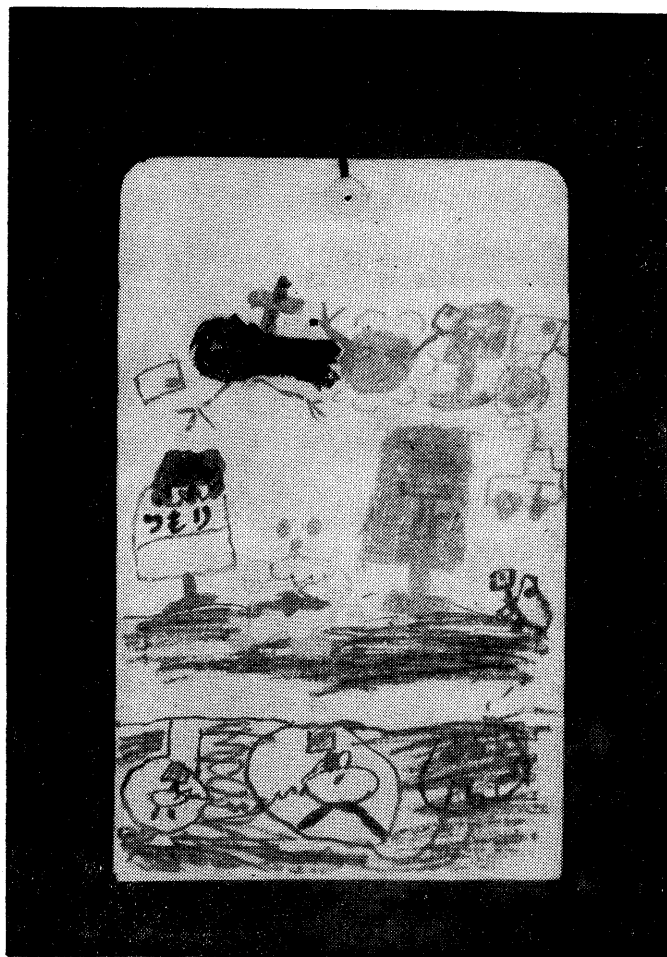


写真 1 色の説明（上から）

から

・空の鳥 黒（手紙を

くわえている）

・自動車 緑（左はし）

赤（右はし）

・うさぎ ピンク（顔

のまわり）

水色（体の

まわり）

・郵便うけ 紫（左

・地下道 紫

## 「かける」こと

人間には、内に向かう心と外に向かう心とあって、あるときにはこちらが、またあるときには他の面が出てきます。ふと気が付いて外に目をむけると、人がたくさんいる、近よっていくとおもしろい世界がある、こう気が付いたとき、人の心は外に向かっていきます。子どもも入園したばかりのころには、早く家に帰りたいと思って、じっと立っていたり、その逆に、幼稚園じゅうを駆けまわったりします。自分の世界をみつめて落ちてくると、先生や友だちに目が向いてきます。子どもはもはや床に目を落しているのではなく、相手に目を向けて、人に向かってゆきます。

同じことが大人にもあります。この子どもと心が通じないと思っているときに、あるとき、子どもの方から、パッと目が向いてくるときがあります。そういうとき、子どもは、土や砂を人に向かってかけます。

私はしばしばこういう経験をしたことがあります。このおじさんはあそんでくれないと思っているときには、子どもは目をまともに向けることもしません。あそんでくれそうだと思うと、何かをハイともってきたり、さらに進むと、土や砂をかけるという行為があらわれてきます。

大人も、ある人に関心があると、その人に目をかけたり、声をかけたりします。子どもだと、砂をかけたり、水をかけたりするのです。それは、この人と一緒にやってみようか、ためししてみるひとつの段階ではないかと思う。そこから、一緒になってあそぶことが生まれてきます。

「かける」というのは、人の心が外に向かうときにあらわれる行為です。

幼稚園の先生は、同じ子どもを、今日も、明日も、次の日も、つづいて見ていけるので、この子はこんなところまで関心が向いてきたというようにみることができます。ひとつの行動だけを他から切り離して、それをいいとかわるいとか考えないでしょう。成長の中でみていくことができるのです。

「かける」ということについて、もう少し事例をさがしてみましよう。

プールにはいると子どもは運動が自由になります。水の中では動きの自由度が増すようです。そうすると、人に水をかけますが、それは、もっぱら、親しい人に向けられます。仕返しでかけるというよりも、親しみの表現であることの方が多い。

また、ある幼稚園にいったとき、ひとりの子どもが、私にいてねいに頭を下げて、お早うございますといったのに、とまどった

ことがあります。この場合は、その子どもと私との間に、社会儀礼がはさまっていて、その子どもの心がじかにとびこんできたのと違うので、とまどったのかと思います。「おじさん、どこからきたの」と声をかけられると、もっと親しさを感して、にこにこ笑いかえす気になります。

私は、子どもからつばきをかけられた経験が何回かあります。

これも普通にあることで、たいがいの人が経験したことではないかと思えます。もっと若いころには、つばきをかけられると、侮辱されたように思って、こんな小さい子どもに侮辱されることはない、むきになって怒ったことがあります。もう少し心がねれて考えてみると、つばきをかけるというのは、侮辱というようなことではないらしい。よく見ると、そのときの子どもは目ばかりきら輝いて、笑っている。私はその話を学生さんにしたら、

こういうことを話してくれました。つばきというのは、自分の体の中で製造した大事なものだ。自分の体の中で作った自家製のものは、人を動かす力をもっている、つばきをかけると人を怒らすこともできる。その学生さんがいうには、涙も自家製のものだ。何でも、あるえらい坊さんが、不良少年のような子どもをひきとって、一人前にしようとしたが、どうしても成功しなかった。ついに、別れようとしたとき、その坊さんの涙が少年の足の上にお

ちた。少年はその涙にハッと気がついて、それから本気になって弟子入りしたという話でした。これはいいつたえですけれども、自家製のものが人にかかると、大きな力を与えることを示すものかと思えます。

先日、現職の先生方の集りで、似たような話がありました。幼稚園で、子どもが、つばきを土でこねて他の子どもにわたしたら、それまでけんかをしていた子ども同士の間、和解が成立したということでした。気がついてみると、つばきで土をこねて人間をつくったという創造神話もあります。

そう思って、つばきをかけた子どもの顔をみると、子どもの顔はますますにこにこしています。

つばきをかける行為の中に、子どもが人に向かってくる積極的な姿をみることができると、そこから、子どもと保育者との新しい関係が生まれてきます。

### 三歳児の作品から幼児教育を考える

ここに三歳児のクラスの小さな子どもが四月から七月までに、かいたり切ったりしたものをかりてきました。私はそれを見て、ああここに三歳の子どもの生活があるな、と思いましたので、その一部を紹介しながら、幼稚園の教育を考えてみたいと思いま

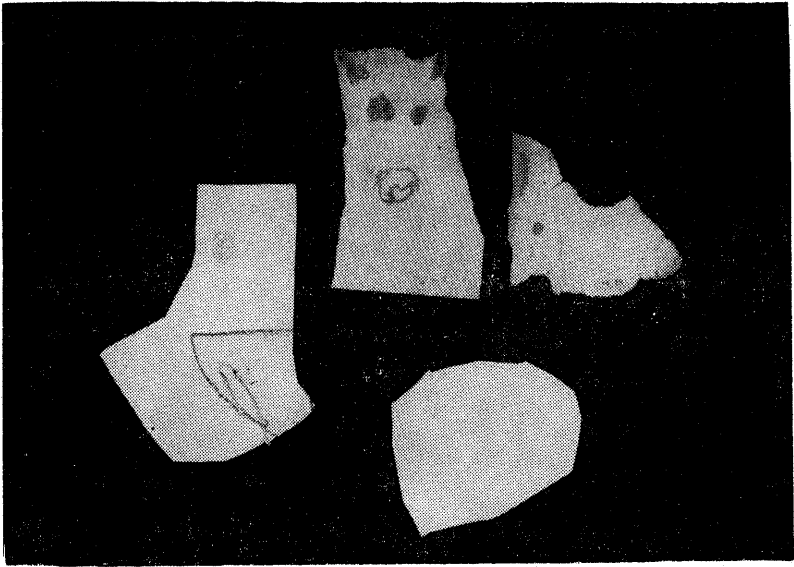


写真 3

写真 2 (a, b)

写真 5

す。(堀合文字教諭のクラス)

写真2を見てください。こういうのを見ると、ほんとに三歳らしいなと思います。自分で破いたのか、破いたのをみつけたのか、その紙片を手にとると、ただの紙切れではなくて、生きて動いたものになるんですね。それに自分がちよっとかきたすと、目がついて、それは自分にとって大事なものになります。三歳児の生活から生れた作品です。

写真3を見てください。こういうのは実におもしろい。だれでも作るものですが、こういうのをいつも作るような幼稚園が本当の幼稚園なのだと思います。自分で何かかいて、切り抜いたものです。クレヨンでしるしをつけた部分は穴ではないかと思えます。子どもにきいてもたしかにそうかどうかわかりませんけど、毎日つき合っている人には、その気持ちはわかると思います。穴があいていて、向う側につきぬけているとみることもできるでしょう。前に似たような作品に出会いましたが、それはストープでした。油をいれる穴がある。子どもにとっては動作が重要な意味をもちますから、穴とは何かをつっこむ動作なのです。

写真4を見てください。これは、うずまきです。大人にも、うずまきのイメージがあるでしょう。どうしたらよいかわからなくて、ぐるぐるさがり求めて、うずまきをかくんです。

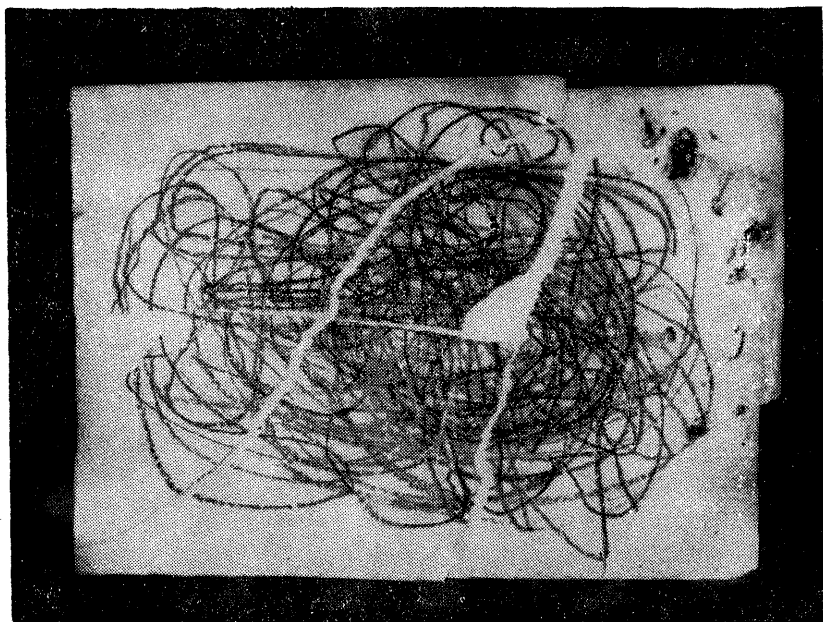


写真 4

その中にこういういいものがあります。うずまきをかいて、強くこすりつけたあまり、紙が破けたものです。それはしばしばうずまきの真中です。ここと思うところがみつかると、いろんな色でぬりたくります。

そうして、きれいな線、多様な動きができるのです（色が美しいが印刷には適さないので省略する）。どうしてよいかわからないで模索しながら、自分の道をつき出していくのです。

毎日の生活も同様で、朝幼稚園にきたときに、どうしてよいかわからないときに、今日はあの子と遊べるか、今日はこんなことして遊べるかいろいろさぐります。今日これで遊ぼうと中心がみつかると、三十分、一時間、一時間半と、そのことを追求していきます。一日の生活をみてもそうで、幼稚園の生活とは、子ども自身がさぐり求めて、自分で中心を見いだして、そこに夢中になつていく生活を作り上げる、そういう生活です。その前には先生に話しかけたり、うろろうしたりする時間があります。幼稚園の生活にはこの両方がある。一人でぶらぶらしたり、ぼんやりする時間が保証されないと、次に一生懸命になる生活が出てきません。

いまの幼稚園は、いつでも子どもが何かをしていることを目標にしすぎるのではないかと思います。



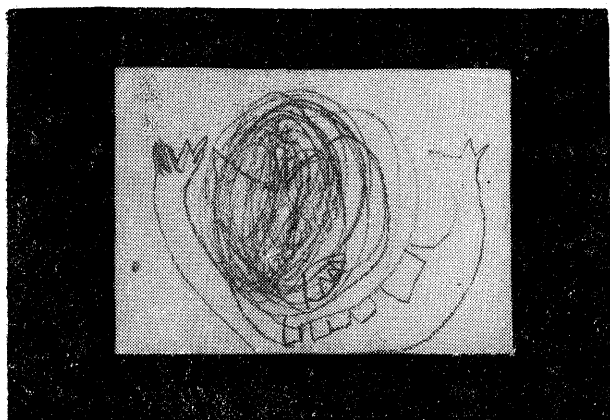


写真 6 (a)

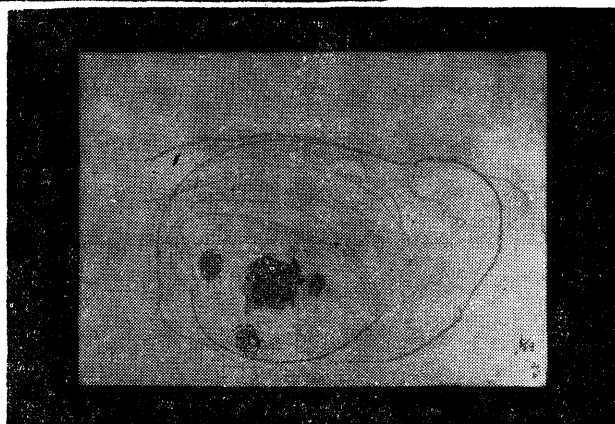


写真 6 (b)

写真5を見てください。これはうずまきですが、はつきりしたうずまきです。これを切りぬいて手にもつというのは面白いでしょう。(59ページ右下)

写真6はうずまきをかいているうちにそれが人間になったものです。人間の顔の絵ができ上がる過程のひとつです。テレビの絵かきうたのようなもので、ハナカいて口かいてチョンというようなのは子どもにとってよくない思いとします。めちゃくちゃができなくなり、心の動きを生活の中であらわし、自分が参加して生活を作り上げることができなくなる。

現代は視覚優位の時代といわれますが、そういう時代なればこそ子どもの原始感覚を大切にしなければ人間の基礎が養われないでしょう。

写真7はまわりがはさみで切りこんであります。一つ一つ切るんです。それには紙をまわさなくてはなりません。ということは、これもうずまきということです。真中に、色紙

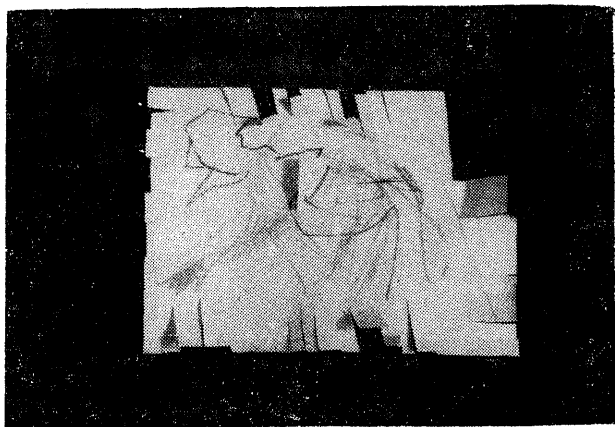


写真 7

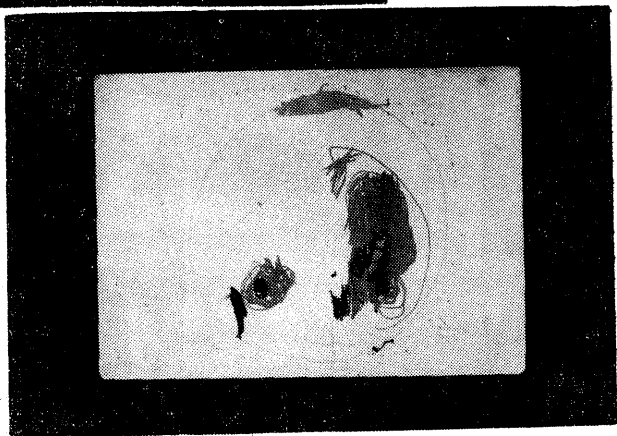


写真 8

をはりつけます。回転の運動感覚です。

写真8の点はリズムです。体が躍動しています。すなわち、心が躍動しているのです。

写真9のデザインはまさに中心のあるデザインです。こういうのをかくようになった子どもは、自分の中で一步成長していると思います。成長とか発達とかいうのは、決して能力だけの問題ではない、一步段階をとび上がったという自分自身の体験がある。新しい世界が自分にとって開けてくる体験です。個々のことができるようになったというのが大事なのではなくて、自分が一歩新しい世界にふみこんだ自覚が生まれる生活、それが幼稚園生活です。

写真10はこの子どもでもかく、「字」です。手紙です。自分の感情をほんとうにあらわしたいとき、子どもは、ほんこの字ではかきません。線の動きでかくんです。こういう作品は幼稚園で大切にしないとけないと思います。大人が目で見るところをこぎれいにす

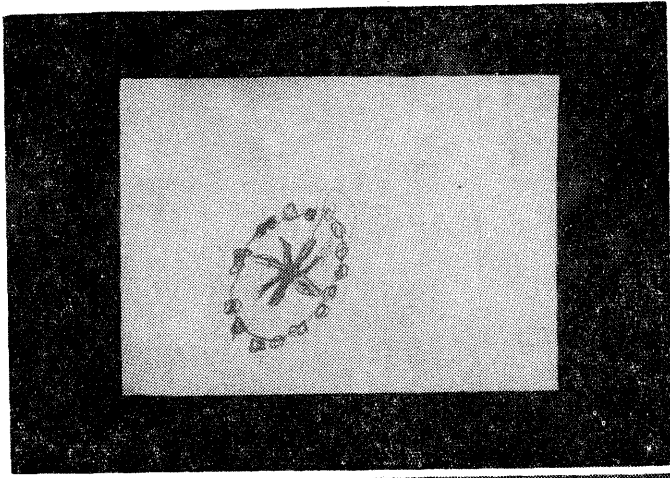


写真 9

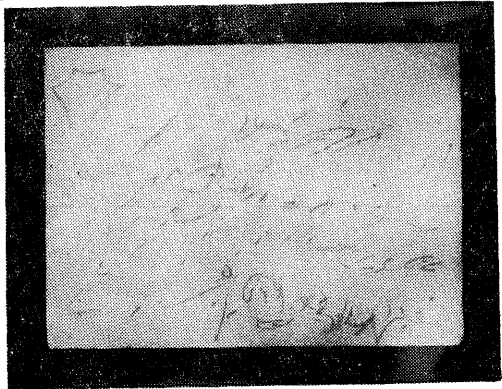


写真 10 (a, b)

ることは考えない方がいいのです。

ここに掲げたのは三歳児のクラスの一学期の作品ですが、これらを見ると、ほんとうに、やわらかい三歳児の生活が目に見えるようです。こういう作品が生まれる幼稚園が次々にあらわれることを願っています。

これは、昭和四十八年七月二十二日、日本幼稚園協会講習会における講演に手を入れたものです。

三歳児の作品は色、線の強弱など、写真ではあまりよくわかりただけなのがとても残念です。

(津守)

